

千葉県市原市内多くのゴルフ場へ人材を輩出する市原高校

市原市は市内に 33 のゴルフ場を擁する



千葉県市原市は市内に 33 のゴルフ場が点在しており、その数は日本一である。市と言う行政単位で、これだけの数のゴルフ場が有るのは極めてまれであり、ちなみに市原市に次ぐのは兵庫県三木市の 25 コースだが、その差は 8 コースもある。

市原市は左図の通り南北に縦長なのだが、真中より少し下がった位置にある水色の高滝湖、その少し上がった位置に牛久エリアが広がっている。この牛久エリアを境に南北と表現するケースが多く、約 27 万人の人口構成は、北部に 70～80%、南部に 20～30%の割合で分布している。

市原市 33 コースは、人口密集地の北部ではなく、過疎化問題を抱える南部エリアに比較的多く点在している。18 ホールコースの用地面積は、一般的に約 30 万坪と言われており、この用地確保を北部エリアで行えるのかと言えば、大変困難な問題だったと推察される。ゴルフ場数増加の過程で必然的に南部エリアへ集中して来たのは、至極当然の成り行きだったのではないだろうか。

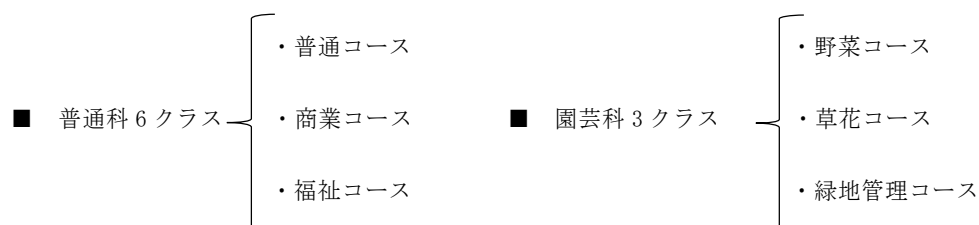
牛久エリアに位置する市原高校は、南部地区の要石的存在

市原市内には公立 5 校に私立 2 校の合計 7 の高等学校があり、この内 6 校が人口密集地である北部エリアに点在しているのだが、千葉県立市原高等学校は牛久エリアにその所在地がある。南北の境に位置する、まさしく市原市を象徴する様な高校であり、ある意味南部地区の中学生を吸収する、その様な役割を背負った存在とも言える。



< 鶴舞グリーンキャンパス_千葉県市原市鶴舞 1159-1 >

現在の市原高校は、旧鶴舞桜が丘高校と旧市原高校が 2019 年 4 月に統合され、新市原高校として今日に至っている。かつて旧 2 高校が有していた特色を継承し、新たな体制になり 2025 年の今年で 6 年目になるのだが、当該校の理念は「地域共創・自主自律」であり、それは校訓としても表現されている。新生市原高校の概要は、下記の通りである。



千葉県立市原高等学校
大岩良徳校長

当該校の概要について更に深掘りした説明を、大岩良徳校長より 2025 年 5 月初旬に伺う機会に恵まれたので、その内容を箇条書きにすれば下記 4 項目に集約出来る。

- ① 地域貢献
- ② できた、わかったと納得するまで面倒を見る学習指導
- ③ 企業や大学をはじめとする地域との様々な連携
- ④ 職業観や勤労観を育てる実践的なキャリア教育

この 4 項目の内の幾つかを、大岩校長のお話から具体的に紹介するならば、その一つにボランティア活動が上げられる。各種ボランティア活動へは、多くの生徒が参加してくれているとの事だが、例えば近年、浜野ゴルフクラブで開催されている女子プロゴルフトーナメントのパナソニックオープンにて、14 番ホールの花壇を製作、そして時には野菜や花の即売会を開催している。

これは地域貢献のみならず実践的なキャリア教育にも役立っており、更には当該校の最寄り駅である上総牛久駅前に、草花のプランターを飾ったりもして地域住民の話題になっている。

大岩校長は福祉とゴルフ場を大きな地場産業と捉えており、これら産業と連携して行く事、或いは貢献出来る人材を輩出して行く事の重要性を強く認識している。福祉については、ほぼ全員が介護職員初任者研修修了と言う資格を取得し卒業しており、これは福祉の基礎を身に付けて欲しいと言う学校側の願いの他、多くの生徒が祖父母と同居しているいわゆる三世帯家族と言う背景もあり、介護資格取得に関しては何ら違和感無く受け入れられている。

生徒が進学するにせよ就職するにせよ、社会生活上でコミュニケーション能力はとても大切だ、と学校側は考えている。コミュニケーション能力を高めて行く事は、他者との相互理解を進め、自らも生き生きと暮らしていける基礎に他ならず、この能力を高める為に某大学と連携したり、或いは様々なプログラムを活用

したりしている。野菜や花の即売会時には、如実にこの能力が試されている。

地域社会に貢献出来る人材を輩出、或いは生徒個人々の夢や希望をかなえさせるべく手助けをして行ける高校、その様な思いを語って下さる大岩校長ご自身も市原高校の卒業生であり、卒業生の誇りを「市高プライド」と呼んでいる。

生徒がゴルフを身近に感じられる市原高校

市原高校では1年生全員に、ゴルフ体験をさせている。2024年の昨年は、9月に近在4ヶ所のゴルフ場へ出かけ行っている。レストランやフロント、キャディマスター室やコース管理などの職場を見学した後、練習場でのボール打ちやパッティング練習を行い、1ホール限定で実際のラウンド体験をしている。

これを同校は「市原高校のインターンシップ・職場体験」、と位置づけている。各ゴルフ場がお客様を迎える為に、多くのスタッフが目に見えない下準備をしている、これを間近で知り得、如何にお客様からプレー代金を頂く事の大切さを、生徒達は実感出来る貴重な見学になっている。社会の成り立ち、その一旦を体験出来ている。

またゴルフとは、止まったボールを打つ事の難しさ、此れも感じ取れる見学会になっている。

市原高校には部活動の一環として、2019年にゴルフ部がつくられた。創部時には約10人の部員がいたものの、2023年から2年間は部員ゼロと言う空白期間を経て、2025年の今年は2名が入部した。ご両親がゴルフをやっている、或いはゴルフ場へ勤務している、その様な親の影響が大きく動機付けになっている様だ。

練習は週1回、学校のグラウンドでのアプローチ練習とネットを使ったボール打ちを行っており、卒業生のティーチングプロが指導してくれている。今後は週1回程度、ゴルフ場の練習場での練習を計画しており、これはかつて近在の3コースから施設を提供して頂いた実績から、再開をお願いしたいと考えている。また市原市役所からのご支援により、新たなコースも候補に上がって来ている。

しかし何と言っても大きな課題は、部員の移動である。此れまでは市原高校後援会から資金提供して頂き、タクシーを利用してゴルフ場の練習場へ、学校から移動していた。これをより負担感の無いものへ、変えて行きたいと考えている。

この解決策として現在浮上してきているのが、バイクでの移動案だ。2025年千葉県は県下の公立高校生全員を対象に、車とバイクの免許取得を許可した。この事から、部員がバイクの免許を取得したならば、部員はバイクでゴルフ場の練習場へ移動し、ゴルフクラブセットは同校職員が運搬する、この様な計画が現実味を帯びて来ている。

大岩校長によれば、近在の中学校へ他県から移籍して来ている生徒が複数おり、その子達はジュニアゴルフの世界では有名選手達との事だ。市内ゴルフ場ではジュニアの練習環境を整備しだして来っており、その数が徐々にではあるが増えて来ている。この様な要素が移住の背景にあるのだと思われるが、大岩校長はこの子達が将来同校へ進学しゴルフ部で活躍してくれる、市原高校の看板を背負ってくれたならば、これほど嬉しい事は無いと大岩校長は語る。

市原高校は近在ゴルフ場への人材供給源

市原高校で学んだ生徒の進路は、進学四割、就職六割と言う状況で推移している。此处では就職面に絞ってみたい。

就職者の99%は自宅から通勤出来る職場を選択しており、その他1%は自衛官や公務員など若干名が自宅を離れざるを得ない生徒だ。



3年生の60%が就職する訳だが、その内どの位の生徒がゴルフ場へ就職したのかについて、同校より資料をご提供して頂いたものでこれの下記へ示したい。

- ★ 2022年度 就職者数 55名 内ゴルフ場 10名
- ★ 2023年度 就職者数 49名 内ゴルフ場 6名
- ★ 2024年度 就職者数 41名 内ゴルフ場 6名

上記実績を多いと見るのか少ないと見るのか、判断は様々だと思われるが、多くの生徒が一度はゴルフ場を就職先として、検討しているのでは無いかと推察される。なお年々就職者数が減少しているのは、少子化の影響からであり、例えば園芸科で言えば、定員40名のところ実際には20名ほどになっている。年々子供の数が目に見えて減少している、と大岩校長は危機感を募らせる。

このような状況下で当該校は、毎年数名をゴルフ場へおくっているのだが、その背景には次の様な点が見取れる。

ゴルフ場が生徒の住まい近くにあり、通勤し易い環境だと言う点も見逃せない要素だと思われるものの、それ以上に市原市であったり当該高校が、ゴルフやゴルフ場との接点を数多く設けている側面が、生徒の就職に関する不安を少しずつ解消しているのだと思われる。

市原高校卒業生の声

2024年度、市原高校を卒業し就職を選択した生徒は上記の通り41名おり、その内6名が近在ゴルフ場へ就職している。この中で鶴舞カントリー倶楽部へは2名が就職している。この2名の阿部さんと岡野さんに

お話を伺う機会に恵まれたので、此処に紹介したい。



阿部さんのコメント

入社前はワクワクとウキウキ感が多かったのですが、いざ入社してみると覚える事が多く、先輩達へいつも質問しています。お客様はフレンドリーに接してくれるので、困りごとは無いですね。家族は何時も応援してくれていますし、自宅通勤ですのでお金も貯めやすいです。

岡野さんのコメント

昨年職場見学をした時に、社員の方とお客様が楽しそうに会話している場面に遭遇し、入社を決意しました。
今は覚える事が多いのですが、メモを取り何度も読み返し覚える様にしています。
後輩の皆さんへは、「在学中は大変でも就職面接の勉強も併せてしておいて下さい」と伝えたいですね。

かつて2018年に旧鶴舞桜が丘高等学校を訪問した時、当時の小林一雄校長は、「市原市の貴重な人材を外部へ流出させたくない、出来るだけ市内で活躍して行って欲しい」と話されていた事が、今更ながら思い出される。この思いは市原市のみならず、現市原高校にも継承され息づいているのだと思う。今回大岩校長にお話を伺い、改めてその様に認識した。

今後益々市原高校が、地域活性化へ向けた要石の役割を果たすであろう事を確信し、この辺でペンを置きたい。

2025年7月15日

文__大野良夫 © Yoshio Oono

日本ゴルフジャーナリスト協会員